

東洋英和女学院大学に「花子プロジェクト」という奨学金制度ができた。返済義務のない給付型奨学金で、何らかの理由で両親と別れ、児童養護施設で育った子どもに大学教育の道を開く独自の取り組みである。

「花子」というのは『赤毛のアン』や『ランダースの犬』などの英米文学の翻訳者である祖母の村岡花子の名にちなむ。教育の機会が均等ではなかった明治期、しがたない茶商人の娘に生まれた花子は一〇歳の時に本校に奨学生として編入した。ここで受けた教育が花子に後の時代を生き抜く翼を与えたのだが、それから一〇〇余年、由縁あるこの大学で新たにこのプロジェクトが始まった背景には、少子高齢化の今の日本で、七人に一人の子どもが貧困状態に置かれているという由々しき実態がある。

基礎的な学力や積極性、心身の健康など、諸要件を充たし、施設長や高校の推薦と面接試験を経て奨学生となった学生には、入学金と四年間の学費が免除、その上必要ならば月五万円の住宅費補助が支給される。本人自らが話さない限り、プライバシーは厳守される。

当然なのだが、現代の花子さんたちは、見た目には普通の女子大生と少しも変わらなない。スマホを使いこなし、今どきの身なりで流行語を話す。彼女らが部活の上下関係に悩



絵・江口修平

## がんばれ、花子さん!

村岡恵理

んでいたりと、必修の単位を落としたり、のびのびと学生生活を送っている様子を聞くとほっとする。

しかし、今の貧困の問題点は、それが目に見えないところにある。彼女たちは時折、教授の研究室に来てティッシュペーパー一箱分、号泣するそうだ。

一般的な家庭の子どもが難なく得る人とのつながりや経験を、彼女たちは貧しさゆえに経験できずに育った。たとえば家族旅行や塾や習い事。これらは無くても生きていけるが、友人の中で自分だけができないというのは、どんなにか寂しいことだろう。

そういえば祖母の随筆にも、女学校時代、友人にクリスマスプレゼントを買えない自分が見じめで寄宿舎でひとり泣いたというのがあった。幼少期に孤児院で育った赤毛のアンも、友人たちが着ている美しいふくらんだ袖のドレスに憧れた。現代の花子さんなら成人式の振り袖だろうか。今後はリクルートスーツも必要だろう。社会人になる前に、ムダのようで決してムダではない、さらさら輝く時間を友人たちとたくさん共有してほしいと思う。たとえ辛いことがあっても、青春時代は人生で一番美しい季節だから。

そのために、何かできることはないだろうか。

むらおか・えり●作家。1967年生まれ。成城大学文学部卒。著書『アンゆりかご 村岡花子の生涯』（新潮文庫）が、2014年前期NHK連続テレビ小説「花子とアン」の原案となる。このほか、『アンを抱きしめて』（絵・わたせせいぞう/NHK出版）など。編著に『村岡花子と赤毛のアンの世界』（河出書房新社）などがある。2019年夏、作詞家岩谷時子の評伝小説を刊行予定。

